

---

# 夢魅堂

空野妃紫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夢魅堂

### 【Nコード】

N5314E

### 【作者名】

空野妃紫

### 【あらすじ】

夢を売り買いする夢魅堂。思い通りの夢を見せてくれたり、大切な人と夢を共有したり。さて、今夜のお客さんは。

黄色い光りをゆるやかにうけて大樹はざわざわと枝をゆらしている。足をかたほう湖につけてそこから穢れない清涼な水をすいあげる。光りも水も空気ですえ完璧なほど正常なその世界で大樹はさけびつづけていた。

「ここからだして」

願いよりも祈りにちかい気持ちでざわざわと腕をゆらしている。

「声が聞こえているなら」

大樹は自分をここからだしてくれるものをまっていた。あきらめることもなく、未来を信じて。

信じていても思いはあせっていた。はやくしないとおくれになつてしまうそれはなにがなんでも阻止しなければならぬ。

（私にのこされているのはこれだけ）

大樹には祈るように言葉をつたえることしかのこされていない。希望の光りをかすかにつかむように大樹は声をとけようと必死だった。

この閉ざされた世界のなかで大樹はいま自分にできることをする。希望を信じてこのさきに自分の望む未来を見るために。

「はやく、私の声に気づいて・・・」

高層ビルが建ちならび人々がいきかう日本の都市、東京。東京のどこかに小さなお店がある。

その店の売り物は夢。怖い夢、楽しい夢、優しい夢、多種多様の夢をあつかっております。もちろん、正夢もあつかっている。店の名は『夢魅堂』。

「・・・お客様だ」

もと夢魅堂の店主はだれに言うこともなくつぶやいた。

「ああ、極上のお客だ。あのかたはどんな夢がご所望なのだろう」

店主は極上の客に満足する。

「はやくいっておやり。お客をまたせてはわるい」

元店主の男は言った。店主はそこではじめて現在の店主に顔をむけた。

アンティークな内装の店内で現在の店主は依頼者の声を聞き依頼者のもとへいく。もと店主の男は店主のさった椅子を見つめて顔にうつすらとしわをきざんでふたたび目を閉じた。

緑が広がる大地。そこが見えるほど澄んだ水は光りの反射で美しく輝いている。穏やかな胎内のような優しい光りがふりそそいでいた。

「よかった」

人々が忘れさってしまった場所に店主はたっていた。店主は両腕を広げている大きな大きな大樹に丁寧にお辞儀をする。

「夢魅堂、店主でございます。どのような夢をご所望ですか」

店主の優しい声と事務的な言葉に大樹はほころぶ。雄大でうつくしい大樹は目を見張るばかりだが、よく見るとところどころ鮮やかな緑は乾き、足もとには茶色くカサカサとした彼女の一部分が散らばっていた。

「よかった。もうあなたにしか頼れなくて」

大樹はほっとしたように店主に言い言葉を少し切ってから店主に依頼をつげた。

「地球の夢のなかに私をつれていってくださいませんか？」

鉛筆画か水彩画で描いたような穏やかで優しい姿の大樹は言った。でも、どこかあせっているように店主には見えて。

「それは大仕事だ。お代が少々かかってしまいますよ」

店主は愛想笑いをしながらつげる。店主の言葉に大樹は緑の葉を一枚おとした。店主はその葉をうけとると大切にハンカチにつつんでしまいこんだ。

店主はその高価な葉に満足し依頼者に微笑みかけた。

「まずはそれだけ・・・」

大樹は店主が葉を胸のポケットにしまいこむのを見ると言った。  
そして、店主の言葉をまつ。

「うけたまわりました」

生命そのもののような美しい葉に満足した店主はどこから不思議な色の粉をとりだし大樹に吹きかけた。粉は大樹のまわりを舞いきらキラと輝いて美しい夢へと誘う。

「よい夢を・・・」

大樹は深い眠りのなかへ落ちていく。もう大樹には店主の言葉もはつきりとは届いてはいなかった。

大樹は目を覚ます。緑を抱えていた両腕は人のものとおなじ形をしている。大地に根をはやしていた足も二本にわかれ人とまったくおなじものになっていた。人間の女の子とおなじ姿になっていた。

その姿をキラキラとゆれる水面で確認するとまわりを見わたす。優しくふりそぐ陽の光り。生き生きとした緑の大地。清々しい水の流れる音と深く広がる蒼い海。はるか昔の地球の姿があった。

「アース・・・」

地球の夢のなかには動物、鳥、魚に昆虫が傷つけあうこともなく存在していた。この星の生物でゆいいつ存在していないのは人間だけだった。まるでその生命がはじめから存在していなかったかのよう。

大樹は歩きだす。はるか昔の地上の姿に懐かしさと寂しさを覚えながら歩く。

はるか昔この星には岩と二酸化炭素におおわれた大気しかなかった。アースはながいときを一人ですごした。ある日、生命が生まれそれは酸素を生み出した。酸素をえたことで地球はひとりぼっちではなくなつた。たくさんの命にかこまれてときをすごすことになった。

人もまたたくさんの生命のひとつだったのにこの世界には存在していない。存在を否定するようにそのかけらすら見る事ができなかった。

「ここは」

奥へ奥へすすんできた大樹の目のまえに豊かな緑を抱えて優しく雄大にたっている大きな木があった。

「わたし・・・」

その木は大樹そのものだった。大樹はそつと木にちかづく。木の幹のあいだに身をまるめて眠っている男の子の姿があった。

「アース」

大樹はこの夢の持ち主にそつと手をのばす。ふれるかふれないかの距離でアースが目を覚ました。

「リーフ？」

しばらくの沈黙のあとアースは大樹の名を呼んだ。リーフはそつとアースの頬にふれる。アースは懐かしそつに目をとじた。

「夢みたいだ。きみを見ることができるなんて・・・」

私たちはいつも二人でいた。しかしもう、半世紀も会ってはいない。二人が会わなくなった理由は人間たちがおこしてしまった歪み  
が原因だった。

「アース・・・」

いたわるようにでも切ない声でリーフはアースの名を呼んだ。アースは名前を呼ばれたことがうれしいのかにつこりと笑った。

「リーフ、まっついてこの夢のように必ずとりもどすから」

アースの言葉に胸が苦しくなった。リーフが望んでいることはそんなことではない。

「アース、どうして地震や津波をおこすの？」

答えがわかっていうことをリーフはとう。

「きまっているだろう。君を傷つけるものを駆除しているのさ」

あたりまえのようにアースは言った。

人が犯してしまった過ち。大地を汚した、大気を汚した、水を汚した、むやみに生命を奪ってしまった。そして、それをアースは許さなかった。

「アース、人間もまた私たちが育んできたのよ」

リーフはアースに言った。他の生命どうよう人間も私たちが育んできたのだ。

「生命のために酸素を生みだしたきみにやつらは傷つけることばかりする」

アースは拗ねたように言い、リーフの手をにぎりしめた。

「でも、それでもあんなことはやめて。それに、悪いことをしたからって消してしまうなんて悲しすぎるわ」

リーフは傷ついた瞳でうったえる。アースに自分の思いが届くように。

「いまさら一種くらいへらしても大丈夫だよ。それに人間なんてこの数百年で何種の生命を絶滅させたかわからない」

たしかに人間たちは自分たちの欲にかられて多種多様の生命を絶滅においやってしまった。なにも言えずにいるリーフにアースは笑いかけて言った。

「リーフきみは優しいから、なんでも許してしまうんだね。僕はゆるしたりしない。きみまで傷つけてのうのと生きているやつらを・・きみも彼らがやったことを思いだせばきつと僕の考えに賛成してくれるよ」

人間がしてきたことを忘れてしまったわけではない。でも。

大気が動いて風が吹く。思わず目をつぶったリーフにアースは言葉のこした。

「きみがいなくなったらだれも生きていけないよ」

アースの言葉にリーフは心のなかで反論しつづけた。それはちがうと。過ちを犯してしまったからといって消してしまうのはちがうと。なんどもなんどもアースに叫びつづけた。いつか聞いてくれると信じて。

（アース、もう生命は私の手を借りなくても生きていけるようになったわ）

リーフが目を開けるとそこはさっきまでたっていた場所とはちが

っていた。さつきまでの優しい空気がつつんでいる世界とは。

リーフがたっていたところは緑と水と生命があふれていた世界とはちがっていた。切り倒された木々たち。焼きはらわれていく緑の芝生たちは生命あふれる緑の姿をうばわれ悲しい墨色に染まっていた。

「私は切りとられても焼きはらわれても再生していけるからいいと思っていた」

きられたところから新しい芽をだし、数十年かけてもとにもどっていく木々。焼きはらわれても大地に新しい芽をのばして一年もしないうちにもどっていく緑の台地。しかし、人間の破壊行為は激しく再生の時間を許さなかった。

「アース、それでも、私は生きていくために彼らに必要ならとわけあたえてきたわ」

どこかで聞いているかもしれないアースに呼びかけるように言った。

人間は木を切りそれを家や紙などの材料としてつかう。大地を焼きそこに畑をつくり、自分たちの食べるものをつくりだす。

焼きはらわれつづけた大地は養分を失い不毛の大地とかし生命の存在を拒否してしまった。大地が許すまで生命を拒否しつづけるだろう。

「リーフ、きみのその思いは人間にはとどいていないんだよ。だから、きみたちがあげた悲鳴にも気づかないであんなひどいことをつづけてきたんだ」

アースの声だけが聞こえる。

伐採された木たちは大地をささえることができなくなり少しの雨でも土をこぼして倒れていくようになった。

「リーフ、見てごらん。きみたちの存在がなくなった大地を」

緑が減るにつれ居場所をうしない数を減らしていく生命たち。そして、やがて砂漠の大地に生命の亡骸が広がっていく。

「アースっ」



悲しいリーフの声にアースがあらわれる。アースは慰めるようにリーフをつつみこむと言った。

「きみだってあいつらのせいで失っていく命を見て泣いていたじゃないか」

そして、アースはつづける。リーフはアースの言葉に涙がでそうになるのをこらえた。

「きみが僕と生命をつなげてきたんだ。はるか昔から生命が大地にたつその前から、ずっと、ずっと・・・」

アースの言うとおりむやみに失われていく命に私はずっと傷ついてきた。傷つきながらそれでも人間を信じてきたのだ。

（いつかつぐなうときがくると・・・）

「でも、でもっ」

（ときが許すかぎり信じたい）

反論しようと言葉をつむごうとする。しかし、どうやってアースに伝えればいいのかわからない。伝えたい思いをどうすればアースにわかってもらえるのか。

「きみがいるから、僕だって生命にあたえることができた」

アースは満ちたりた声で言った。

「見てごらん。きみだけじゃない。やつらは大気を汚染し、水を汚染しそれでもたりないのか土壌まで汚染している」

アースは空を見あげる。アースの見あげたさきには真っ赤にもえる太陽があった。

「きみが生命たちのためにつくったバリアーはもうほとんど壊されている」

生命にとって紫外線は有害なものだった。それを酸素がオゾンと変化してさえぎってきたのだ。

「人間だって生きること懸命だわ」

リーフはアースにうったえる。どんな生命も自分の命を保つことには貪欲になる。

「そうだね。生命はみなそれを基準に動くから。でも、人間たちは

求めるばかりであたえることをしないよ」

アースは忘れてしまったのだろうか。人間たちも私たちと共存していたときがあったことを。

「人間たちだつて私たちと共存してきたときがあったわ。それに、なにもないところから私たちはつくりあげてきたじゃない」

リーフの言葉にバカにしたようにアースは言った。リーフの言葉をバカにしたんじゃない人間をバカにするように。

「じゃあ失くしたんだ」

長いときをすごしてきた。ときはこくこくと変化しておなじように自然や環境も変化していった。そんななかでもかわらないものがある。

「人間はいま見失っているだけ」

リーフの言葉にアースはイラだったように言った。

「もういいつ。それじゃあ、すべてをけしていちから僕ときみでもういちどつくりなおそうか？」

アースの言葉に傷ついた瞳の色を見せるリーフにアースは表情をやさしくやわらげる。そしてアースはリーフの臉を掌で隠すと言った。

「リーフ、きみは優しいから。僕が全部かたづけてあげる。きみが悲しまなくていいように眠っているあいだにね」

リーフの言葉を聞きながらリーフの意識が遠のいてしまう。夢のなかのそのまた夢のなかへ落とされていく。底のない広い世界へとされていく感じに逆らえずにリーフは沈んでいった。

リーフがいる世界は生命が知恵という果実を手にするまえの世界だった。彼らは本能的で即物的だけど世界の輪をよく理解していた。なにかを得てはなにかをささげること。これが世界の真理だった。他の命を奪って生きていく。しかし、その身が滅びれば土にかえり他の生命のかてになる。そんな輪がぐるぐるとまわって世界は安定していた。

（おだやか）

心地よくまわる輪のなかは不安なものもない。求めてはあたえ、あたえては求める。生命は自由でそして、果す義務を果していく。

（やさしい太陽）

緑の葉を生き生きと照らしているのは太陽だった。葉は木陰をつくりそのしたにはたくさん動物たちがくつろいでいる。

肉食獣も草食動物もおなじようにくつろいでいる。自分の生命が維持できていれば無駄な争いはしない。生き物たちの暗黙の了解だった。

「アース」

必ずとなりになっていたアースをリーフは呼んだ。幸せも悲しみもともにわけあたえてきたアース。

「リーフ。こんな世界がずっとつづくよ」

アースの言葉にうなずきながらリーフはこのままじゃいけないよな気がした。どうしていけないのかわからないけど。

「僕が守ってあげるからね」

アースは優しく言う。世界は完全で間違いはなにもないように思えるのにしなければならなかったような気がして気持ちが安定しない。

「アース、私になにか忘れている気がする」

アースはおかしそうに笑うと安心させるように言った。

「リーフが気にすることじゃないよ」

（そうなのかなあ）

リーフは小さな小さな疑問を残しながらアースの顔を見る。アースは優しい目でリーフを見つめている。なにも心配ないよと語りかけてくるような顔をしていた。

夢魅堂の店のなか。店主は揺れている大地を感じながら、椅子に座っている。その椅子は細かな細工と上品な木の色をしていて椅子にはられた布も木の味わいをよくうつしだしている。店主のはじめ

ての仕事の代金としてもらったその椅子はいまでも店主のお気に入り一品だ。

揺れはだんだんと大きくなってきていて、外では不安のかくしきれない人々のざわつきが聞こえてきてめざわりだった。

「やれやれ、正夢をご所望されればこんな面倒にならずにおすみになるのに」

依頼者が夢のなかの夢にしていることをしりながら店主は言った。

店主みずから手をだすことは禁じられている。支払い以上のことは基本的にしないのが遙か昔からの店の決まりだ。

「地球全体がゆれている」

鏡にうつる世界を見ながら店主は言った。大地が揺れれば波がたち津波を誘発する。人がどれだけ科学という力をもち進化していったとしても自然に拒まれればおわりだ。それを失念してしまっている。

鏡のなかには人間以外の動物の姿はない。彼らは自然に守られていた。だから逃げて安全な地へ逃れていく。

「現に拒まれているがね」

元店主の男が言葉をもらした。

「人の思考を読まないでください」

店主は少し気がわるそうに言った。しかし、もと店主はそんなことを気にすることもなく店主に言った。

「営業にいつてきなさい。このままじゃあ、依頼者がきのどくだ」

その言葉に溜め息とともに店主は立ちあがると依頼者のもとへといった。店主がさった椅子を見つめてもと店主は深く息をはくと心配そうにその椅子をみつめた。

依頼者は深い深い夢のなかにて眠っている。なにかも忘れて夢のなかに身を落としているその顔はとても安らかでこのままにしておいてもいいのではないかと思わせるほどだった。

店主は彼女の夢にはいるためそつと彼女の額にふれる。すつと彼

女の夢のなかにはいつていった。

「きれいなところですね」

夢のなかにはいった店主はつぶやいた。いまはもうほとんど失われた美しさがそこにあった。

「邪魔をしにきたの？夢屋さん」

男の子があらわれて言った。店主は男の子を見つめたまま言う。

「営業ですよ。アース様」

アースはその言葉を聞くと笑いながら言った。

「じゃあ、僕が依頼主になってやるよ」

ほうと興味深げな瞳で店主はアースを見て聞いた。彼が必要とする夢に少しばかり好奇心を刺激されたのだ。

「どんな夢をご所望で」

アースはあどけなく笑って言う。それはまるで子供がサンタにプレゼントをねだるように。

「人間が全部きえる正夢をひとつもらおうかな」

店主は表情を曇らすことなく言う。

「その代償は大きいですよ」

「なにがほしいの？」

店主の言葉にアースは答える。

「大地を揺らしてばかりじゃ、なかなか思うようにことははかどらなくて、困っているんだ」

アースの言葉に店主は言う。なんともないことのように当然のことだとも言うようなことだった。

「では、リーフ様をいただきましょう」

店主の言葉にアースの表情が険しいものへとかわる。信じられないことを聞いて驚きよりも怒りが先行した。

「なんだって？」

そんな険しいアースのようすにも店主は平然とした顔で言う。なにかおかしいことでも言いましたかと言うような表情で。

「正夢は当店でもっとも高価な品でございます。最高の品には最高

の支払いでなくては」

アースは店主の言葉に小憎たらしい目をむけると言う。

「まあ、いい。邪魔さえしなければそれで」

「交渉決裂ですね」

店主は残念なようすも見せずと言うとアースをのこし夢のなかをさ迷う。アースは店主がきえた場所を見たまま。

「夢屋か。変なやつ」

アースはそう言うത്リーフの夢からでていった。リーフはきつとこのままことがおわるまで眠りつつける。

おきた時に彼女が悲しむなら夢屋にたのんで夢のなかにその悲しみを閉じこめてもいい。そんなことも考えながらアースは高鳴る気持ちをとまらない。

人間を排除してきれいになつたらリーフをおこそう。そんな楽しいことを考えるとアースの心はワクワクと高鳴った。

アースとはなれてからだいぶんと夢のなかをさ迷っている。夢屋なのだから得意分野なのだがなかなかなものだった。

「しかし、複雑に隠されていますね」

依頼者を見つけられずにいる店主はばやいた。彼女のいろんな夢を渡りながら彼女の姿を探す。いつもならなんのこともないことなのだが。

一匹の緑のきれいな鳥が店主の頭にとまった。鳥は店主の頭をつんつんと軽くつついでくる。

「痛いですよ」

べつにそんなに痛くはないのだが店主はそう言って頭の上の鳥を捕まえようと手をのばす。

鳥はつかまらないように飛び立つと店主のまわりをクルクル飛びまわって、それからどこかへ飛びさってしまった。

「しかたないですね」

店主は鳥を追いかけていった。鳥を追いかけていくつも夢をすぎ

ていく。すぎていく夢にはリーフとアースのときを閉じこめていた。夢のおくのおく。無意識で見る夢のさきにまでいき。店主は依頼者を見つけた。そして、体を軽くもちあげると声をかける。

「おきてください」

眠る彼女に店主は言った。横たわっている依頼者はうつすらと目を開くと戸惑った瞳を泳がせる。

「ここはあなたの深い夢のなかです」

店主は依頼者がなにかを言うまえに言った。

「ご依頼承りに参りました。どんな夢をご所望でしょうか？」

店主の言葉にはつとしてリーフは立ち上がる。

「アースをとめないと」

店主はリーフの手をひきよせて依頼者を抱き寄せるとそっとはいあがるように飛びあがった。

「夢からでましよう。依頼はそれからお聞きますから」

深い夢の底から上へ上へあがっていく。夢の出口をもとめて進んでいくと明かりが見えた。あまりの明るさに目をつぶりそうになった依頼者に店主は言う。

「目をつぶらないで」

リーフはまぶしそうに手をかざしながらも目を開いて光りのなかにはいつていく。

光りのなかからでるとこじんまりとした部屋のなかだった。

「ここは？」

リーフの呟きに店主は言った。

「わたくしの店です」

そのとき大地が揺れた。大きな揺れに店主もリーフもおもわず態勢を崩す。

「アースをとめないと」

リーフはそう言つてどこかへいこうとする。その手を店主はつかんでひきとめた。

「まちなさい」

「でもっ」

切羽つまった顔でリーフは言い店主を見る。

「正夢をお買いになられればすぐにおさまります」

店主は正夢を買うことをリーフにすすめる。

「正夢でアース様があなたの思いを理解なされるように願えばよろしいでしょう」

リーフはゆつくりと首をふってそれを断わった。そんなことで他のものの気持ちを思うようにはしたくはなかった。

「それじゃあ、意味がないわ。無理やりじゃなくほんとうに理解してほしいの」

そう言ってリーフは手を振りほどいた。店主はふたたび手をつかむとリーフに言う。

「アース様の夢にいきましょう」

「でも、アースは目覚めて」

店主は笑顔をつくとリーフに言った。彼女がどこまでやれるのか見てみたい。

「寝てみるだけが夢ではありませんよ」

いつのまにか椅子に座っていた老人はアースにそう言つと深いしわを刻んでゆるやかに笑った。

「そうです。さあ、いそぎましょう」

そう言つて店主はリーフをつれて夢のなかへきえていく。

アースは満足げに人々が地震に恐怖している姿を見ていた。次の地震が最大級のものになる。他の生命はもう逃げていていない。そうターゲットである人間だけがのこっているのだ。

「無駄にふえるから逃げ場もないんだ」

小さな子供のような無邪気な声でアースは言った。

余震の影響で津波が各海岸でおきている。あつというまに海にのみこまれていく人もいる。地震のもっとも便利なところは二次災害である。消し忘れの火元が原因の火災。その火災がまたガス爆発な



どを誘引する。海は大きな波をつれてきて人や人が築いてきたものをのみこむ。

（これほど便利なものはないね）

アースはそう思うと最後の大地震を起こそうとした。そのとき急に意識がうばわれた。

そのままどこかへひきずられていく。目を開いたらその場所はアースの夢のなかだった。その夢は見る夢ではなく叶えたい夢のなか。思わずアースは現実と夢の区別をうしなう。

「リーフ」

アースの夢のなかにリーフがいた。リーフの横にはあの夢屋がいる。夢屋がいたことでなんとなくこれは夢なんだとアースはくべつすることができた。

「アース、これ以上はなにもさせない」

リーフの言葉にアースは無邪気に笑うと夢から覚めようとする。

ここはアースの夢のなかだから覚めることは容易なことだ。

「まだ、つきあってもらいますよ」

店主はそう言うと言夢の入口を閉じてしまった。これでアースは自由な夢からでられなくなってしまった。

「どういっつもりだ」

イラついた目でアースは店主に言った。いまにも噛みつきそうなアースのようすにリーフはあわてて言った。

「私が依頼したのよ」

リーフの言葉に忌々しそうに視線をそらしたアースはリーフに言う。

「どうしてここまで邪魔するの」

子供が母親にすぐるようなアースにリーフは思いをこめて言う。

「人間たちは気づきはじめているわ。だからっ」

「もう少しまって」と言おうとしたリーフの言葉をアースがさらっ  
つていく。

「いまさらまてないよ。君も他の生命たちもかなり弱っているだろ。だいいちどうして僕が用意した場所にいないの？」

たしかに弱っていた。だからアースは私を正常な世界に閉じこめたのだ。なにを犠牲にしてもアースはリーフをその世界に閉じこめた。

「私はそんなこと望んでないわ」

そしてリーフはその世界からでてアースをとめるために夢魅堂に依頼したのだ。手助けをしてもらいたくて。

「でも気づきはじめてるのよ。あと少しで昔のように共存しているわ。共存さえできるようになれば私も環境も治っていくことができる」

リーフの言葉にアースは悲しそうな瞳で言った。そんなこと可能ではないと否定の色を強く秘めた瞳だ。

「無理だよ。僕はリーフにいつまでもそばにいてほしいんだ」

自分の限界がちかいことがわかつているリーフは安易に「大丈夫」だと言えないことにはがゆささえ覚えてしまふ。うわべだけの言葉をアースにつかいたくはなかった。

「それでも・・・」

小さな声でリーフは言ったがアースにはとどいていないだろう。

しかし、店主にはその声が聞こえた。

「リーフ様が危なくおなりになったときに正夢をお買いになればよいのではないでしょうか？」

おし問答をくりかえしている二人に店主は提案した。しかし、アースは納得していない。

「人間のためにこれ以上たくさんの代償をはらうのか」

アースの言葉に店主は冷静なまなざしで告げる。

「人間のためではありません。リーフ様のためです」

アースはいぶかしがりながらつぶやく。店主の意図がつかめない。リーフのため」

店主は「そうです」とつぶやくと言葉をたしていく。

「このままではリーフ様がお悲しみになる。せめて五〇年でもお待ちになられてからのほうが納得もいくでしょう、おたがいに」

アースはリーフを見る。リーフの請うような瞳を見つめて逃げるように背をむけた。そのままきえてしまった。

（なにを考えているのかわからないやつ）

アースはそう思いながらリーフから逃げるようにきえていった。

リーフをあの世界に閉じこめたときとおなじ気持ちがある。

リーフを悲しませることの恐怖に怯えてリーフのそばにいられなくなった。間違ったことをしているとは思われないがリーフが傷つけてしまうことに罪悪感をおぼえた。

いなくなってしまったアースにリーフは悲しそうにアースの名を呼んだ。

「大丈夫ですよ。夢からでることはできませんから。とりあえずいちじ休戦です」

店主は肩を落としてしまっているリーフに励ますように言った。

「そうですね。まだまだ時間ありますよね」

がんばって精一杯の笑顔をむけるとリーフは「がんばるぞ」と体をのばした。痛々しい感じのするその背を店主は見つめる。

そのころアースは考えていた。人間があやまちを犯しはじめたころ地震をおこしそのあやまちを罰しようとした。そんなアースにリーフは言ったのだ。

「アースもうすこしようすを見てあげて」

リーフは優しい目で言ったのだ。

「まだ、なにもわかっていないだけだから、気づいたらきつともとどおりになるように努力すると思うの」

リーフの言葉にアースは不安を覚えた。そこしれぬ不安が心にうずまいた。リーフを失ってしまうようなそんな冷たい不安。リーフは自分がいなくなることをなんとも思わないだろう。自分よりも自分以外に尽くしてしまうから。

（リーフ、きみがいなくなってしまうたら僕は・・・）

リーフが生まれるまでアースは一人だった。リーフが生まれる前

に命はいくつか誕生した。けれども会話なんてできなかった。はじめて自分以外の声を聞いたときの思いは忘れられない。

「私に名前をちょうだい」

はじめて話しかけられた。はじめて笑いかけられた。やわらかくてあたたかなその笑顔にアースははじめて喜びと孤独をしまった。孤独なんて感じていないと思っていたのに。

「リーフ」

アースは『リーフ』と名づけた。名前をもらったリーフはそれはそれはうれしそうに言ったのだ。

「ありがとう」

最初はこの言葉は名前をつけてもらったことへのお礼だと思った。でも、

「一人にしないでくれてありがとう。これからはずっといっしょだよ」

リーフはそう言った。「ずっといっしょだよ」その言葉に自分がどれほど寂しい思いをしてきたかした。はじめて気づいて、リーフが隣りにいることにほっとした。

そしてこんなことも言っていた。

「一日のなかでいちばん夜が好き」

アースは夜が嫌いだった。嫌いだとわかったのはリーフが生まれきてくれたあとだったけど。

「どうして？」

あんな暗くて寂しい世界を好きだと言ったリーフの気持ちがしりたくてアースは聞いてみた。すると彼女はいとおしそうにそして優しい顔で僕に言ったのだ。

「だって、こんなに暗いなかにもあんなに光りがあるんですもの」  
そう言って夜空に目をうつして両手を広げ星と月を抱きしめているようだった。

「どんなに苦しいことがあっても光りがひとつでもあればがんばれるわ」

そんなリーフの姿が夜なのに太陽のようにまぶしくて目をほそめて見ていたことをいまだに鮮明に覚えている。

（どんなに暗くても希望の光りはかならずある。リーフはそう言っ  
て夜の暗さも星や月の精一杯の光りも愛していた）

アースにとつて嫌いだった夜はリーフがとなりにおいてくれること  
で少し好きになれるようなきがした。あくまでもリーフがそばにい  
てくれないといけないけど。

優しいリーフに心ごと救われたのだ。このときからリーフがそば  
にいない世界を描けなくなった。

（さんざん長い間一人でいたのに・・・）

たくさんの感情をくれたリーフとの日々を思いながらアースは思  
う。

「生まれたときからきみは優しかった」

リーフはずっとずっと優しくかった。きつとこの先もずっとずっと  
かわりはしないだろう。リーフがあまりにも優しいから傷つけたく  
なくてアースはあのときリーフの意見を尊重したのだ。

「でも、もう・・・」

（限界だよ。リーフ）

リーフが弱りつつある。リーフがもしものときのために新しい生  
命の準備をしていることに気づいてしまった。

「だからきみを閉じこめたのに・・・」

だからリーフをあ的正常なものをかためてつくった世界に閉じこ  
めてリーフがよわっていくことを少しでもくいとめようとした。

リーフは信じているのだ人間があやまちに気づいたときその罪をつ  
ぐなうと。そのときに自分がいなくなったときのためにあたらしい  
命をのこしてまでも。

「リーフがいなくなるぐらいなら・・・」

自分に言い聞かせるようにアースは言った。

（そのことにくらべたらなんのこともない）

リーフを閉じこめたあと、すぐには人間に手をださなかった。イ

ライラしながら人間のようすを見つづけていた。彼らが改心すると信じて。

しかし、彼らは改心どころかひどくなるばかりで。リーフがいなくなるくらいならきつと悲しんでいるリーフを見ているほうがまだと自分を奮い立たせながらアースは動きはじめた。

店主の言葉にやる気をとりのどした。リーフはアースをさがしにいかうとした。しかし、店主にとめられる。

「まってください」

店主の言葉にリーフは店主のもとへもどる。

「なにかありました？」

リーフの言葉に「いえ」と店主は答えるとお茶セットをだしてのんびりとイスにすわった。店にあるのとおなじようにアンティークな品物だ。

「お茶にしましょう？こんをつめてもいいことはありませんよ」

店主の意図がつかめないリーフはどうしていいのかわからず。「

あの」とか「でも」とか言っている。

「考える時間が必要です。あなたもあちらも」

そう言って店主はお茶の準備をする。リーフはとりあえず腰をおろした。

「紅茶でよろしいですか？」

リーフは戸惑いながら「はい」と言うと店主をよく見つめる。かわった人だと思うが思慮深そうな感じも受ける。

「あのう。アースをさがさないでいいんですか？」

店主はカップをさしたすとなんともないように言う。

「かまいません。少し考える時間をあたえることも大事ですよ。それよりこれからどうしますか？」

店主の言葉にリーフはだまってしまう。たしかにこのまま押し問答をつづけていてもただ無駄に時間がすぎていくだけ。なにひとつアースに伝えることはできない。

「リーフ様の願いをアース様にお見せになられてはいかがですか？」  
だまってうつむいてしまったリーフに店主が提案した。

「見せる？」

リーフは意味がわからずに言葉をくりかえした。

「そうです。言葉だけではなかなかつたえきれないのなら、あなたの描いている未来をアース様にお見せになればいい。それなら足りない言葉をおぎなってくれるのではないのですか？」

店主はにこやかに言った。リーフはその提案に表情を明るくするものへ変化させていく。

「いいです。それ！やりましょう」

いきおいよく言ったリーフに店主は事務的に告げる。

「リーフ様の夢のお買い上げは二つ。アース様を夢のなかにとじこめたことはこちらが勝手にさせていただいたことですしサービスにさせていただきますが・・・」

指を二本たてながら説明をした店主にリーフは不安になる。三つ目の夢を支払うだけのものが自分にはないのかと。

「私はもう三つ目の夢を買うことができないんですか？」

リーフは恐る恐る店主に聞く。店主は愛想笑いを浮かべながら説明する。

「いいえ。ですが三つ目の夢を購入なさいますともしものときのために正夢がつかえなくなってしまうです」

どうします？というような店主の目を見つめてリーフは迷わず言った。

「さつきも言いましたが正夢を買う気はすこしもないんです。言いなりになってほしいんじゃないわかってもらいたいただけだから」

迷いのないまっすぐとした瞳が語りながら穏やかに優しくなっていくことに店主は好ましいとおもった。

「いいでしょう。そのかわりあなたの宝物をひとついただきます。よろしいですか」

店主もつられて穏やかに笑ってしまった。

「ええ。これがおわつたらとどけますね」

リーフは店主にそう言うとはんわかと微笑む。カップを手にもって言ったリーフの姿に店主は思った。

（こんな優しくて純粋な少女のようなひとが人間を守ろうとしているなんて）

少女のような可愛らしさとどこまでも包みこもうとするあたたかさ。そんなリーフが苦しむ姿も悲しむ姿も見たくないというアースの思いがわかったようなきがした。

（このかたはなにを犠牲にしても守ってさしあげたくなる）

アースも抱いているだろうおなじ思いを店主も思わずにはいられなかった。

アースはあせっていた。出口が見つからないのだ。あとは大地震をおこすだけなのだ。警告ではない排除するための災害。遙か昔の人々は地震や日照りがおきると天災だといって恐れたがいまはちがう。

完全に人々は我々のことを忘れさってしまった。そして、はどめがきかなくなつた彼らは動物を植物を自然を傷つけることしかしなくなつた。

「くそつ、あの夢屋めっ」

あせっているのかアースらしくもなく言葉が荒い。

半世紀前に見たときよりも一時間前に見たときよりも刻々とリーフが弱つていつているのがわかつた。

（リーフがいなくなる）

それが怖かつた。リーフがそばにいることそばで笑っていることそれがアースの願いだった。だからたくさんの生命が傷つかないように海を大地を大気をもとのえていった。そこで生きていけるようにと。

（人間をけさないと）

皮肉なことにリーフが必死になつてかばっている人間がリーフを



傷つけている。こうしている今でさえ環境を汚染してその結果リーフを傷つけていく。

「夢屋から出口をかうしか・・・」

つぶやいたアースの頭上を突然光りが爆発する。光りはアースをつつみこんで小さくなった。

「なっ」

光りはアースをのみこんでしまった。アースは目をさました。

生き生きと枝を伸ばし深緑の葉をつけている木々がたちならぶ。

その横を不思議な形をした車が走っていた。その車からは有害な気体はでておらず排気口すらない。

建造物にはソーラーパネルが必ずついておりそれで電気を補っているようだった。都市のなかを澄んだきれいな水が川をつくりそのなかには魚がおよいでいる。

建造物と緑との調和が保たれ。他の生命が生きていくための緑も水もあった。アスファルトの禍々しさはなく緑によりそうように大地があった。

人間も他の生命も緑もすべてが適切な距離をもち共存しているそんな感じの世界だった。

「ここは・・・」

ためらいがちにつぶやいたアースは自分が今どこにいるのか全くわからない。

人間がすむ町のはずなのにそこにはきちんとした自然の姿もあった。アースはためらいながらも町のなかを見まわるように歩いている。

町からはずれると森のなかにはいつていった。そこにはさまざまな生命がいて自分たちの生活をおくっている。

アースは太陽を見あげた。太陽の光りは昔のように穏やかで優しく地上を照らしていた。ふっとリーフのことが気になり探すように走り出す。

（リーフは・・・）

この世界がどこだかわからないがもし未来ならリーフがいなければ意味がない。アースは息をきらして走りつつける。

急にひろい広い場所にたどりつく。太い幹に大きな両手を広げ、緑と小鳥を抱いた大樹の姿があった。

「よかった。リーフ」

アースは両手を伸ばして大樹の幹を抱きしめる。幹からはドクンドクンと鼓動がきこえ生きていることを証明した。

(・・・)

鼓動が聞こえてくる事実に関心したその鼓動にも安心を覚える。  
「アース」

不意に名前を呼ばれアースはいつのまにか閉じていた瞳を開ける。大樹から顔を覗かせている女の子がいた。

「リーフ。どうして」

アースは少し驚いた顔でつぶやく。そんなアースにリーフは優しい笑顔で微笑みアースの手をとった。

「アース、ここは私の夢のなかよ」

うれしそうにつぶやいたリーフにアースは言う。

「夢のなか？」

「そう、夢のなかなの。私が叶えたい夢のなか」

リーフは目を輝かせて言った。

「アースは人間なんていなくなったほうがいいって言うけど、私はそうは思わない。人間だって必要よ」

リーフの言葉にアースはだまりこむ。

「こんな世界むりだよ」

悲しそうにアースは言った。リーフがいつものように笑ってくれるなら叶えてあげたい。

「無理じゃないわ。いますぐには無理でもきつとちかい未来に叶うわ。だって、ようやく気づきはじめて自分たちのできることを考えはじめているもの」

悲しそうなアースにリーフは言った。未来はここにつながってい

るんだというように希望をもって。

「今すぐじゃないときみがきえてしまう」

アースの深刻な目とあせったような言葉にリーフ自信をもった目で言った。

「大丈夫。私は絶対にいなくなったりしないから」

実際、人間たちは空気を大地を汚さないようにいろいろと考え出しそれを実行している。傷つけた傷口に薬をぬろうと必死になってくれているのだ。

「でも気づくのがおそすぎたよ」

納得できないように言ったアースの言葉をリーフは言い聞かすように言った。

「アースも急激な変化で多くの生命を困らせたわ。人間たちもおなじよ急激な進化のせいで少しかだけ見落としただけ。それだけだわ」

アースは体の変化に対応できず急激に環境を変化させそのことでたくさんの生命を死に追いやってしまったことを思い出す。氷に閉ざされた世界とその世界のおわりのときである。

「でも、もう五〇年もまてない」

リーフの状態を考えると五〇年も待つてはいられなかった。

「アースよく見て。人間のなかにも私たちを助けようとがんばっている人はいるわ。まだまだ小さな環だけど、一生けんめい薬をぬろうと必死になってくれる人もいるの。そんな人たちもいらないの？」

アースは目をつぶった。傷つけるような行為のなかにもたしかにかすかでもその傷を治そうと必死になっている人の姿があった。

それは国や企業などの大きなものから分別やボランティアによる小さな取り組みまでさまざまだった。

（いままで気づかなかった）

「きつと五〇年もあればもっとたくさんの薬があつまって私たちが自力で治すよりもっともつとはやく治るわ」

希望に満ちたリーフの目にアースは思った。

（この目だ。いつもこんな目で笑ってた）

久しく直視しなくなったらリーフのまなざしにアースは心が締めつけられる。いつも希望を明るい未来を思いながらリーフは笑ってアースのそばにいた。

（・・・僕が守りたかったのはこの笑顔なんだ）

「アース見て」

目をつぶったままのアースにリーフは言った。

リーフの言葉にそっと瞼をあける。アースの目にひろがったのはキラキラと輝く町の光りと大空に散りばめられた満天の星空だった。「きれいでしょ」

言葉もなくただその光りに目を奪われていたアースにリーフは言った。

星空がキラキラと輝いているのは大気が澄んでいて清らかな証拠だ。昔のようなきれいな夜空と人間の営みの輝き。

（夜がこんなにきれいに輝くなんて・・・）

アースはそう思うと同時にこの夢をかなえてあげたいと思った。

「私のいちばんの夢はこのきれいな夜をアースといっしょにお散歩することなの」

夜の光りに瞳をあずけたまま言ったリーフの横顔をアースはみつめる。その顔はうれしそうでおなじくらいキラキラ輝いていた。

（もし、僕が人間をけしたらこの笑顔もきえてしまうのかな）

アースは考える。きっとではなく必ずきえてしまう。リーフを守りたいけどこの笑顔を失ってはいけない。この笑顔ごとリーフを守らないと意味がないのだから。

「リーフ、僕はきみを守りたいんだ。なによりも大切に守ってあげたい」

誓うようなアースの言葉にリーフはアースを見つめる。

「きみの願いは叶えてあげたいし、いつまでもそばで笑っていてほしい」

アースは自分の思いを言った。このリーフの夢見る世界ごと守つ

てあげたい。

「リーフがそうしたいというなら、五〇年まってみるのもわるくない」

苦しそうに言ったアースにリーフは声をかける。

「アース・・・」

アースはその言葉に励まされたのか言葉をつむぎだす。

「・・・でも、きみにもしものことがあつたら僕はどうすればいい？」

心からのアースの叫びにリーフは気づいた。わかっていると思っていたのに実はなにもわかっていなかったことを思い知らされる。

（アースはずっとずっと怖かったんだ）

リーフが生まれたとき世界にはアースしかいなかった。新しい生命が生まれるまで二人きりの世界でながいあいだいたのだ。

（リーフきみは特別なんだ）

アースは心のなかで何度もつぶやいた。リーフにもその思いは伝わってきて大切にしてもらっている喜びとなんだかわからない苦しさに涙が溢れた。

「アース、ごめんね」

リーフは自分がいなくなってもアースはいつときは悲しむかもしれないがきつとたちなおると思っていた。世界には命があふれていてもう二人きりの世界ではないから。

（でも、ちがうんだね）

「アース、ごめんね。自分のことばつがり考えて、もっともつとアースのこと考えてあげるべきだった」

思いがあふれるように涙があふれていくリーフの瞳を見つめてアースは言った。

「リーフ・・・」

アースは泣き止んでほしくてリーフの名前を呼んだ。

「アースを一人きりの寂しい世界においていくところだった」  
でも、リーフの涙はとまらなくてアースは手をのばした。

「もういいんだ。大丈夫だから、もうっ」

（泣きやんで）

そんな思いをこめてリーフを抱きしめる。泣いてほしいわけじゃなく笑っていてほしいんだ。

「・・・ありがとう」

アースの思いが伝わってきてリーフは涙を流すのをよけいとめられなくなった。アースの優しい気持ちがあつたところから流れこんできてうれしくてたまらない。

「もう少しだけまってみることにするよ」

泣きやまないリーフにアースは言った。アースにはリーフがいればそれでいいけどリーフにはそうじゃないから。欲張りな彼女はみんなといつしよに生きて生きたいと思うから。彼女がいなくならない範囲であるなら無理を見守ってあげたい。そんな無理をしているリーフごと守ってあげようとアースは思う。

騒がしい夜が静まり物音しない朝の公園。ベンチのうえには酔ったままその場で眠ってしまった若者の姿があつた。

若者はスキンヘッドに鼻や耳にピアスをジャラジャラとつけお世辞にもガラがいいとはいえない。環境にやさしくないタイプの人間である。

「へっくしゅんッ」

朝の寒さに目をさました若者はベンチからおきあがる。なにか夢を見ていた気がしたがまったく覚えていない。

「・・・」

髪のない頭をかきむしりながら公園内を見わたすとおもむろに立ち上がり公園をさるうとする。

「かん？」

カンッと乾いた音をたてて蹴り飛ばされた缶はカランコロンと静かな朝には似つかわしくない音をたてて転がっていく。

転がっていった缶を若者は寝ぼけた目で追いかけた。なにげなく

若者は空き缶にちかづくとその缶を拾いあげてわざわざゴミ箱に捨てた。

きちんと缶と書かれたそのゴミ箱に若者は空き缶を捨てるとゴミ箱を背に公園をあとにした。

都会の片隅の小さな店のなか店主はアンティークのカップでお茶を楽しんでいる。

「おまえもなかなか粋なサービスをするようになったね」

もと夢魅堂の店主が気に入りの椅子に優雅に座っている現在の店主にむかって言った。

「しかし、伝わっているかはわかりませんよ」

店主はそう言うとかップに口をつける。店主がお客様のためにしたサービス。それは人間たちの夢のなかに二人の夢をしのばせることだった。

「覚えていなくてもあれだけの愛でつつまれているとしては無視はできないだろう」

もと店主はにこにこ満足そうに笑いながら言った。そんなしわの深い顔を見ながら店主は言う。

「そうですね」

店主自信も驚いてしまうほどの優しく穏やかな声だった。そしてなにかあきれたように言葉を足していく。

「サービスのつもりでしたが、これではサービスにはならない」

大樹から支払われたものを見つめながら店主は言った。元店主もそれを見て「ほう」と声をもらすと言う。

「それではお釣りをわたしにいかないと・・・」

店主の手のなかにはあめ色に輝く琥珀があった。きれいなその樹液の結晶は透きとおっていてそのなかに長い長いときを閉じこめている。店主の白い手袋をあめ色にそめている。

「まったくです」

店主はそうかえすと琥珀をそっとテーブルにおいた。琥珀はとき

の偉大さをたたえるように穏やかに輝いている。

店主はそつとカップを覗き込んで満足そうに微笑んだ。聞こえてくる聞こえぬ声に耳をかたむけながら。かれらとおなじようにさきにあるだろう未来を思いながら。

大気はあいかわらず汚れている。大気だけじゃない、土壌も水も緑も絶滅にひんしている生き物たちだってたくさんいる。

でもそんな暗いくらい苦しい世界にも星のように輝く光りはあつてそれはまだまだ小さくて闇を吹きとばすことは無理だけど、きつといつか。

（リーフが見つめる希望の光りがまたひとつまたひとつふえていくことを信じている・・・）

アースは穏やかな気持ちでささやいた。地上にいる世界の命あるものたちに。

うつくしいきれいな葉を広げ穏やかで自信に満ちたリーフは風に無数の葉を飛ばし人々の枕もとにそつとおくる。

彼らがおかしてしまつた灰色の過去と彼らがつぐないつくりゆく光りに満ちた未来を激励するように。彼らには届かないし見ることもできないだろうが、それでも彼らの心のなかにはのこると信じて。

（信じているから・・・）

アースの言葉とリーフの言葉は風にのり人々の足をとめ、空を見あげさせた。彼らにははつきりと声としてとどいてはいないが彼らには心を感じるなにかがあつた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5314e/>

---

夢魅堂

2010年10月8日15時42分発行